

曲目解説

Intermezzo sinfonico

Giuseppe Manente (ジュゼッペ・マネンテ) 作曲

「交響的間奏曲」

中野 二郎 編曲



Giuseppe Manente

マネンテは1867年2月2日イタリアのサンニオのモルコーネに生まれ、1941年5月17日ローマで没した作曲家である。幼い頃から音楽を好み、王立陸軍学校付属の軍楽学校に入り、1903年、歩兵第三連隊軍楽隊長になった。作品は主に吹奏楽のために書かれているが、マンドリン合奏のためにも多くの作品を残しており、その中には1906年のIl Plettro誌の第1回作曲コンクールで銅杯を受賞した幻想曲「秋の夕暮れ」や1908年の第2回作曲コンクールで上位佳作を受賞した序曲「メリアの平原にて」、1906年のシヴォリ音楽院の作曲コンクールで第2位を受賞した4楽章の交響曲「マンドリン芸術」などの重要な作品が含まれる。マネンテは作曲において、演奏媒体は二次的なもので、吹奏楽で作曲され、後にマンドリン合奏に編曲された序曲「小英雄」(Il Plettro誌の第4回作曲コンクール第2位受賞)や、その反対にマンドリン合奏のために作曲された後に吹奏楽に編曲された「メリアの平原にて」が存

在するなど、作曲者自身による作品の編曲が多い。日本では中野二郎(1902年~2000年)の手による吹奏楽作品からの編曲版(序曲「国境なし」、幻想曲「華燭の祭典」)など、数多く取上げられている。本曲は1896年に発表された処女作の吹奏楽曲である。中野二郎がマンドリン合奏用に編曲、1968年6月29日、同志社大学マンドリンクラブ第72回定期演奏会(大阪毎日ホール)で初演され、以後、マンドリン合奏の重要なレパートリーとなっている。

Scènes pittoresques

Jules Emile Frédéric Massenet (ジュール・エミール・フレデリック・マスネ) 作曲

組曲「絵のような風景」 マンドリン弦楽合奏版 初演

飯塚 幹夫 編曲



マスネは、1842年、フランスのモントーで生まれた。1848年、家族とともにパリに移り住み、1853年11歳でパリ国立高等音楽学校へ入学した。1862年、カンタータ「ダヴィッド・リッツィオ」(David Rizzio)でローマ賞を受賞、3年をローマで過ごした。その後、普仏戦争に兵士として従軍し、その間作曲活動を休止したが、1871年に戦争が終わると、創作活動に復帰、1878年からはパリ国立高等音楽院の教授を務めた。彼の最大の成功は、オペラの作曲であり1884年の「マノン」、1892年の「ウェルテル」と1894年の「タイス」などがある。後者の第二幕第1場と第2場の間奏曲が「タイスの瞑想曲」。その甘美なメロディはヴァイオリン独奏の名曲としてよく知られている。マスネは世界で最も人気のある作曲家で、申し分のないメロディメーカーであり、良きにせよ悪しきにせよ、誰が聞いても間違いなく彼の作品だとわかるような強い個性を持った芸術家であった。1912年に没したので今年

は没後100年である。組曲「絵のような風景」は、彼が作曲した7曲の管弦楽組曲の4番目の曲で、1874年、パリで初演された。曲は南フランスの美しい農村風景の印象を題材に作曲されたもので、次の4曲から構成されている。

1 行進曲 (Marche) 明朗なマンドチェロとギターの手拍子によって始まり、低音部のピッキングを伴奏に、マンドリンによって行進の旋律が流れる。行進曲といっても軍隊風のものではなく、あたたかみ、さわやかな朝もやの中を農民たちが教会へ急ぐ光景かのような平和で素朴な行進曲である。

2 舞踊曲 (Air de ballet) 低音系楽器が四分の三拍子の軽快な踊りのリズムを刻む上を、マンドラが民謡風の親しみやすいメロディを歌い始める。これはいかにもマスネらしい流麗で美しい旋律であり、やがてこれにマンドリンが装飾を加えながら進んでいく。なごやかな雰囲気のある村の舞踊と歌の気分をあらわした一曲であろうか。

3 晩鐘 (Angelus) ギターの静かなメロディがあらわれる。それに続いて、はるかかなたから教会の鐘の音が聞こえてくる。暮れゆく田園風景、静かに流れる教会の鐘を聞きながらそっと十字を切る農民の姿……。あたたかみミレーの

名画「タベの祈り」を音楽にしたような清純で素朴な心持に満ちた曲である。歌の旋律と鐘の音は、広大な田園いっばいに広がる。マンドリンの鐘は細かく装飾されて、大小多数の鐘の音がにぎやかに交錯するように聞こる。

4 ジブシーの祭り (Fete boheme) 勇ましいファンファーレによってお祭りの開始が告げられると、たちまち全合奏によるにぎやかな踊りが始まる。やがて軽快な曲調に移り、次に転調して短調に変わると再び最初のファンファーレがあらわれ、曲は第二部に入る。マンドラの歌うゆるやかな旋律がマンドリンを加えて繰り返され、次第にその勢いを増して、また第一部の熱狂的な祭りの舞曲を再現し壮大華麗に終わる。

マンドリン合奏には、コムラードマンドリンアンサンブルの指揮者、飯塚幹夫氏によって編曲され、コムラードマンドリンアンサンブル第7回定期演奏会(1980年)で自身の指揮で初演され好評を得た。以後、マンドリン合奏の重要なレパートリーとなっている。今回は福岡シンフォニックマンドリンアンサンブルの為に、飯塚氏自ら弦楽合奏版として再編曲をしていただきました。心よりお礼申し上げます。

Adagietto ~ Symphony No.5 in Cis moll

交響曲第5番 第4楽章「アダージェット」

Gustav Mahler (グスタフ・マーラー) 作曲

マンドリン弦楽合奏版

飯塚 幹夫 編曲



グスタフ・マーラー (1860年 - 1911年) は、19世紀末から20世紀の初めにかけてウィーンで活躍した作曲家、指揮者である。彼の生地はボヘミア (当時はオーストリア=ハンガリー二重帝国の一部、現在のチェコ共和国)。父親は酒造業を営む実業家で、地元のコダヤ人社会の成功者であったようだ。彼は、息子に事業を継がせるつもりだったようだが、息子の音楽的才能を見抜き、より完全な音楽教育を受けられるよう尽力したらしい。15歳のときに、ウィーン楽友協会音楽院 (現ウィーン国立音楽大学) で学び、18歳で卒業するまでの間に、演奏解釈賞と作曲賞を受賞するなど、その才能を発揮した。その後、20~30歳代の間に、ライプツィヒ歌劇場、ブダペスト王立歌劇場の楽長や芸術監督を歴任、さらに38歳のときにはウィーン・フィルハーモニーの指揮者を務めるなど、若くして指揮者としての名声を確立した。

マーラーが活躍したころのウィーンは、のちに“世紀末ウィーン”と称される、極めて多様な学術や爛熟した文化が花開いた一大都市空間であった。同時代にこの地で活躍した芸術家、文学者には、美術におけるグスタフ・クリムト、演劇におけるホフマンスタール、文学におけるフランツ・カフカ、シュテファン・ツヴァイクらがいる。また、学術の世界に目を向ければ、精神分析学の泰斗ジークムント・フロイト (マーラーはフロイトの診察を受けたことがある)、哲学者のヴィトゲンシュタイン、物理学者のエルンスト・マッハなどなど枚挙にいとまがない。マーラーは、こうした文化のただなかで、卓越した指揮者として名を馳せていたが、彼の交響曲は、なかなか聴衆に理解されず、マーラー自身もコダヤ人であることから様々な艱難を受けた。マーラーの交響曲が現在のように演奏会のレパートリーとしてポピュラーになったのは、1970年代後半のマーラーブーム以降だと言われている。その中でも第5番は、最も人気が高い作品となっている。その理由としては、大編成の管弦楽が充実した書法で効果的に扱われ、非常に聴き映えがすること、音楽の進行が「暗→明」というベートーヴェン以来の伝統的図式によっており、マーラーの音楽としては比較的明快で親しみやすいことが挙げられる。とりわけ、本日演奏する第4楽章アダージェットは、巨匠ルキノ・ヴィスコンティ監督による1971年の映画『ベニスに死す』(トーマス・マン原作) で使われ、ブームの火付け役を果たしただけでなく、マーラーの音楽の代名詞的存在ともなっている。交響曲第5番は、1901年夏にスケッチを始め、翌年夏に完成させている。作曲に着手する直前、マーラーはウィーン・フィルハーモニーの指揮者を辞任、また、この曲の作曲中に当時21歳のアルマ・シントラーと出会い、結婚している。指揮者のメンゲルベルクによると、第4楽章アダージェットは、アルマへの愛の調べとして書かれたという。この楽章は、ハーブと弦楽合奏のみで演奏される静謐感に満ちた美しい曲であるが、この曲の魅

力を言葉で表現するのはなかなか難しい。切ないほどの優しさを湛えた旋律、心が浄化されるようなハーモニー、決して手の届かないどこか遠くの何かに対するあこがれ、死と隣り合わせの生……。

凡庸な言葉を超えた音の連なりは、聴く者の感情を揺さぶり、強い印象を残して静かに消えるように終わる。純粋な美の具現と思えるような美少年に魅入られた、老作曲家（マーラーその人をモデルにしたといわれる）の苦悶と恍惚を描いたこの映画において、この曲は、まさにそのような言葉では表せない感情の表現を司ったもうひとりの主役であった。

本日のマンドリン弦楽合奏版は、コムラードマンドリンアンサンブルの指揮者、飯塚幹夫氏によって編曲され、本年7月22日同アンサンブル第40回記念演奏会(東京 紀尾井ホール)で自身の指揮で初演された。マンドリンという楽器の表現力の限界への挑戦ともいえるアダージェットをお楽しみください。

今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。

Symphony No. 1 in D major (Op. 25)

古典交響曲 二長調（交響曲第1番） マンドリン弦楽合奏版

Sergei Sergeevich Prokofiev（セルゲイ・セルゲエヴィチ・プロコフィエフ）作曲

小穴 雄一 編曲



プロコフィエフ(1891年-1953年)はロシアのウクライナに生まれた、作曲家、ピアニスト、指揮者である。ピアニストである母親に影響を受け、幼少のころからその音楽的才能はすば抜けたもので、5歳で最初のピアノ曲を作曲し、そのうち和声・形式・管弦楽法の基礎を学ぶと10歳の頃にはすでに4楽章から成るシンフォニーを書いている。1904年からは、サンクトペテルブルク音楽院で作曲・ピアノを本格的に学ぶ。音楽的に早熟した彼にとっては音楽院の授業は屈辱なものであった。しかし作曲家で指揮者のニコライ・チェレプニンに出会い、特にその神秘性や感覚的な音響に刺激を受けたことから、プロコフィエフは強烈で個性的な音楽の作曲へと導かれることとなる。

ロシア革命後、1918年5月7日シベリアを経由して6月1日来日。2ヶ月滞在して8月2日離日。アメリカへ亡命。その後パリへ居を移す。滞在中は、日本で最初の音楽評論家と言われる大田黒元雄の厚い持てなして、軽井沢・箱根・京都・琵琶湖・大阪・奈良などを散策。帝国劇場では自作曲を含むピアノリサイタルも開催した。プロコフィエフの滞在中は、ヨーロッパの大作作曲家、最初の訪問と言うことができ、日本の音楽界に少なからず影響を与えたといわれる。20年近い海外生活の後、1936年に社会主義のソビエトへ帰国。ソビエト時代には、ショスタコーヴィッチ、ハチャトゥリアン、カバレフスキーらと共に、社会主義国ソビエトを代表する作曲家とみなされたが、シダーノフ批判（ソビエト連邦共産党中央委員会書記、アンドレイ・シダーノフによる、前衛芸術に対するあら捜しと、それに伴う芸術様式の統制）を受けるなど、必ずしも順風であった訳ではない。

広いジャンルにわたって多くの作品が残されており、演奏頻度の高い傑作も多いが、自身が優れたピアニストであったことから戦争ソナタ(ピアノソナタ6番7番8番)など、ピアニストの重要なレパートリーのひとつとなっている。

「古典交響曲」は、プロコフィエフの作品の中では、「ピーターと狼」と並んで非常によく親しまれている。

この曲は1917年、ハイドンの作曲技法を研究した作品で、驚きを持って迎えられた。ハイドンが生きていたら書いていたような作品は、モダンで非常にシンプルな構成となっている。編成もハイドン時代のもと同じで一種のパロディ音楽で、曲中のいたるところにあり、粋なユーモア感覚が散りばめられている。この曲は「現代人が住んでいる古い町」という言葉で例えられ、全曲を通して意表を突くような転調の面白さや不思議な感覚が溢れ、まさにその言葉どおりのような曲となっている。米国へ亡命する直前の1918年4月21日サンクトペテルブルクで自身の指揮で初演された。

第1楽章 アレグロのソナタ形式。いきなり元氣良く分散和音のような第1主題が登場。この主題は定石を破りすぐに

八長調に転調。推移の主題が演奏された後、跳躍の大きい第2主題が軽妙なスタッカートで登場。一区切り付いた後、両主題が拡大されたりリズムがずらされたりと軽妙に展開。再現部は八長調で出てきた後、二長調になり、古典の定石とはかなり違う。

第2楽章 ラルゲットの緩やかな楽章。形式的には3部形式。最初に高音で出てくる主題は、澄み切った透明感に溢れている。その後、楽器を換えて主題が出てくるのはハイドンによくあるパターン。

第3楽章 ガヴォット。古風で実際の舞踏的な点がプロコフィエフらしく、現代的な雰囲気と可愛らしさを併せ持った魅力的な楽章と言える。短い中間部で別の主題が出てきた後、ガヴォットの主題が弱音で再度登場。楽章は力を抜くかのように終わってしまう。なお、この楽章の主題はバレエ「ロメオとジュリエット」の中でも使われている。

第4楽章 非常に急速で活気のある短いソナタ形式。主題はいずれも軽快で、絶えず細かいリズムの動きが伴っている。意表を突く細かい転調は、弾く者にとって非常に高度な技巧が求められる。最後は華やかな気分が盛り上がり、プロコフィエフの見事な技にただただ酔っているうちに、終結を迎える。

マンドリン合奏には小穴雄一氏が編曲。自身の指揮でLMC(レディース・マンドリン・クラブ)第17回定期演奏会(2010年)に初演。本日演奏する「古典交響曲」は、管楽器・打楽器が入っていない、マンドリン弦楽合奏版で演奏します。今回の演奏にあたり快く演奏の許可を頂きました事、心よりお礼申し上げます。

「古典交響曲」のこと 小穴雄一

プロコフィエフって、やっぱり凄いと思います。最初の出会いは誰でもそうだと思いますが、ほくも「ピーターと狼」でした。あの出だしの爽やかなこと！のびのびして、あの開放感とルンルンと陽気な調べ。古典的と思いきや、いきなり転調して、不思議な国の装いもとびきりお洒落です。プロコフィエフの特徴はなんといってもウィットにあり、必ず謎かけのような「ひとひねり」があります。変幻自在の転調だけじゃなく、リズムも凄い！第5番のシンフォニーの怪物みたいな音楽を聴いたときも全身に駆け抜けるような感動に浸ったものです。いつもプロコフィエフを聴くと、キュビズムや抽象画絵の中をさまよっているみたいな感じになります。ほくはプロコフィエフが大好きです。

さて、古典交響曲をマンドリンでやろうと思ったのは、LMC という団体（かれこれ10年近く関わっています）からの依頼がきっかけでした。最初は、「できるのだろうか？」という気持ちと、「やっていいのかなあ？」というのが同時にこみ上げてきました。しかし、取り組んでみると、これが意外にマンドリン合奏に合っていました。その鍵はピッキングにありました。トレモロを極端に抑制して、もっぱらピッキングで放つんです。音を放ったあとの音の行方にこだわってみると、生き活きとした音像が実現できたのです。ほくはゴルフはやりませんが、ボールを放ったあとに、ボールが放物線を描きながらフェアウェイに吸い込まれていきます。そういうイメージの音を綴ってみる。とくにフレーズの最後の音。「どこまでも飛んでゆけ！」そんなふうに願いを込めて放つのです。さまざまなパートで音を飛ばし合うようになります。そうすると、まるで、おしゃべりをしているみたいに！一見無機質的な、いや、ほんとうは温もりもあるのですが、うわべはクールな装いで、やりとりが鮮明になります。音を飛ばす。まずこれ。そして、もう一つは浮遊感覚、飛翔感覚ですね。これで音楽が失速しません。ふわふわと空を漂うように、風に舞い上がるように、どこまでもしなやかに描いてみる、そうすればきっとプロコフィエフの顔が見えてくるはず！

いつも拙いアレンジを演奏いただき感謝しています。ただ、アレンジの限界というのがあります。いろいろ解決していないところもあるでしょう。結局演奏家が楽譜から感じとるものに触発されて、一定のイマジネーションを抱き、そこからは技術と工夫によって練り上げていくものに違いありません。さあ、いったい福シンの古典はどんな仕上がりになっているでしょう？奇想天外、全く予想もつかないような事になっているかもしれません。そういえば、ギターはあの速さでは間に合わないので、倍速のアルペジオに修正しましたが、福シンのギターはただ者ではないので、ひょっとしたらそのまま弾いてしまうかもしれません。いや、きっとなんらかの工夫が施されていることでしょう。楽しみに伺いたいと思います。そして、福岡の美味しい料理を囲んでみなさんとわいわい交流する終演後のひとときを楽しみにしています。盛會を祈ります。